## 5月31日　三位一体の主日　ヨハネ3章16～18節　世を救うための愛の神秘

先週の聖霊降臨の主日で父と子と聖霊の三つの神のペルソナが出そろったので、今週は三位一体の神秘をお祝いします。今日の福音はヨハネから、ファリサイ派のニコデモとの対話において示されている神の愛を表す言葉です。聖書と典礼の説明にもあるように、イエスの言葉なのか福音記者の言葉なのか明確ではないので、「そのとき、イエスは言われた」という冒頭句はありません。いずれにしても、イエスの教えを表す言葉として教会に伝わってきたものでしょう。

神はなぜ三つのあり方を示されているのでしょうか。世界でも日本でも、三大なんとかとベストスリーを選ぶ傾向がありますね。三大美女とか三大仏とか。世界三大がっかり（マーライオン、人魚姫、小便小僧）や日本三大がっかり（札幌時計台、はりまや橋、オランダ坂）とか。三大仏は奈良・鎌倉は確定ですが、三番目を高岡、岐阜、神戸などで争っています。神さまのほうで三つに合わされたわけではないでしょうが、三角形は一番安定した形で上からの力に強いです。鉄橋や屋根組もトラス構造が力学的に強いとされていますね。東大寺大仏殿の屋根裏にも補強のために明治時代の修理から鉄骨トラスが組み込まれているそうです。大仏つながりの話題になりましたね。

救いの歴史から考えると、この三つのあり方は旧約の神（父）、新約のイエス（子）、教会に働く霊（聖霊）と三つの時代に即応したものであるということができます。旧約時代には父である神が預言者を通してイスラエルの民を導かれ、新約の時代には子であるイエスが直接教えられ、イエスが天に帰られてからは聖霊が降り弟子たち、そして私たちを世の終わりまで導かれます。そのように考えると、三位一体の神秘は人類の救いと密接に結びついていることがわかります。いや、救いのための神秘であるといってもいいでしょう。

「三位一体」を記念するというと、三つの神の関係がどうなっているのか、どのようにつながり、どのように離れているのかということを知ることが求められているように思います。ちょうど科学者が宇宙の構造がどうなっているのかを研究するように。しかし、それが救いのための神秘であるならば、わたしにとって神が三位でいらっしゃることがどのような意味を持つのか、ということを考えることが大切なのではないでしょうか。

今日の福音では「神はそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」と記されています。「世」は神に従わないこの世を表すこともありますが、ここではわたしたち人類とわたしたちの世界を示すといえるでしょう。つまり、イエスの派遣と受難は神の愛によるものであるということです。そして、三位一体も神の愛を表す神秘なのです。

三位一体の神はわたしたちと離れたところにおられるのではなく、ともにいてくださいます。父と子と聖霊の三角の真ん中にわたしたちがいると考えることができるでしょう。その神の愛をまわりの人に分かち合うために神はともにおられるのです。　（柳本神父）